



特別活動のカリキュラム評価に関する基礎的研究

著者	根津 朋実
発行年	2013
その他のタイトル	Fundamental research on curriculum evaluation of extra-curricular activities
URL	http://hdl.handle.net/2241/120830

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 4月 19日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22531010

研究課題名（和文） 特別活動のカリキュラム評価に関する基礎的研究

研究課題名（英文） Fundamental research on curriculum evaluation of extra-curricular activities

研究代表者

根津 朋実（NETSU TOMOMI）

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号：50344958

研究成果の概要（和文）：この研究課題の目的は、特別活動の改善に資する評価方法の開発だった。第一年次は国内外の文献を参照し、理論的に検討した。第一年次の末に東日本大震災が発生したため、以後の研究計画を修正した。第二年次は、教科「自由研究」から「特別教育活動」（中）や「教科以外の活動」（小）への課程化について、史料を収集した。第三年次は、戦後の教科外活動に成果を残した宮坂哲文に注目し、父詰宗の影響を考察した。

研究成果の概要（英文）：In this three-year study, I aimed for developing an evaluation method contributing to improve extra-curricular activities. In the first year, I reviewed and analyzed relevant literature in and outside Japan. However, at the end of the year, the Great East Japan Earthquake occurred, prompting me to revise the original research plan. Thus, in the second year, I collected historical records about curricularization of the "special educational activity" (junior high school) and "non-subject activities" (elementary school) from the subject "free study." I focused on Tetsufumi, Miyasaka in the third year. He contributed to support extra-curricular activities in postwar Japan. His father, a Zen monk, Tesshu seemed to have some influence on Tetsufumi's study.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総 計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード： 特別活動、カリキュラム評価、教科外活動、木宮乾峰、宮坂哲文、宮坂詰宗、教科「自由研究」、課程化

1. 研究開始当初の背景

教科学習の評価に比べ、特別活動の評価は、ごく基礎的な段階から検討を開始する必要がある。なぜなら、研究の量に乏しく、かつ従来の研究は児童生徒の評定に偏する傾向

があったからである。ここに、特別活動を一種のプログラムとみなし、その実態把握および改善を図るためのプログラム評価研究、および学校教育に特化したカリキュラム評価研究の知見を取り入れ、児童生徒の評定とは

異なる次元の評価研究を、新たに構想する必要がある。

2. 研究の目的

この研究は、学校の教科外活動、とりわけ特別活動の改善に資する評価方法を開発するという目的をもつ。そのために、研究代表者がこれまで研究してきたカリキュラム評価の方法論を、特別活動にも応用できるよう検討するものである。

3. 研究の方法

当初設定した研究課題および方法は、次の4点だった。

(1) 特別活動（教科外教育）の評価に関する理論的な検討を、国内外の文献を用いて行う。

(2) カリキュラム評価の方法論を特別活動に適用するための予備的考察を行う。とくにチェックリスト法を中心とする。

(3) これまで行われてきた複数の実践事例を対象に、課題(2)で開発したチェックリストを用いてシミュレーションを実施する。

(4) 学校・教員の協力を得て、課題(2)で開発したチェックリストを試行する、であった。

課題(1)および(2)は第一年次に遂行し、おおむね達成できた。ところが第一年次の末に発生した東日本大震災により、その後の研究計画や方法を見直さざるを得なくなった。

そこで、前述の課題(3)および(4)を、次の通り改めた。

(3)' 教科「自由研究」から「特別教育活動」(中学校)や「教科以外の活動」(小学校)への課程化、それにとまなう評価論等の変化について、史料にもとづき検討する。

(4)' 課題(3)'に関連して、戦後の教科外活動に多大な貢献を果たした教育学者、宮坂哲文に注目し、検討を進める。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

① 第一年次

第一年次は基礎的作業を遂行した。具体的には、プラング文庫等の諸データベースや先行研究の記載を利用し、関連文献のリストを作成して、文献の収集と整理に努めた。

その結果、次の事実を発見した。すなわち、当時の文部官僚木宮乾峰が、月刊教育雑誌『教材研究』に多数の論考を発表し、日本の

教科外活動の成立(1951年版学習指導要領(試案))に重要な役割を担った、という事実である。関連して彼の履歴から、木宮乾峰、ヘーゲル研究に名を残す日高乾峰、日高一二三の三者が同一人物であり、戦前期の文部行政にも関与していた事実を、改めて確認した。これらの成果は、学会発表1件、学術論文2件として公にした。

もう一つの作業は、「カリキュラム評価の方法論を特別活動に適用するための予備的考察を行う。とくにチェックリスト法を中心とする」だった。これについては、学会発表1件、学術論文1件として成果を公開した。

② 第二年次

東日本大震災に伴い、第二年次以降の研究計画のうち、実践的な検討に関わるチェックリスト法の現地化(localize)やアクションリサーチに関する部分を、大幅に見直さざるをえなくなった。

そこで当初の研究計画を、次の通り修正した。すなわち第二年次は、史料にもとづき、教科「自由研究」から「特別教育活動」(中学校)や「教科以外の活動」(小学校)への課程化、それにとまなう評価論等の変化について、検討することとした。

その結果、これまで未検討だった『小学生の自由研究』、『たのしい図画工作』(ともに株式会社技報堂刊)といった教育雑誌を、「再発見」した。それらの雑誌の実物や「プラング文庫」の複写物から、戦後の新教科「自由研究」と「図画工作」等との関連性を確認できた。さらに、戦後の教科外活動の淵源を、戦中、とくに国民学校期との連続性において理解する必要性を見出した。

如上の研究成果は、国内外の招待講演を含む学会発表、および査読付き学術論文として公にした。また、研究の過程で確認できた諸史料を根拠として、複数の検索データベースの運営者に、掲載情報の修正を依頼した。

③ 第三年次

第三年次はこれまでの研究関心を維持しつつ、戦後の教科外活動に多大な貢献を果たした教育学者、宮坂哲文に注目し、検討した。

主な研究成果は次の二点である。

まず、宮坂哲文の父、宮坂喆宗に注目する必要性を指摘した。喆宗は禅僧として知られていたが、学校教育との関わりは詳細が不明だった。そこで主に公刊資料を渉猟したところ、3点の著作、および20件以上の記事類を発見した。これらは禅に加え、成蹊学園や「錬成」に関する内容も、豊富に含んでいた。喆宗の履歴および著述活動については、学会発表1件、学術論文1件として公にした。この成果から、哲文の教科外活動の研究過程には喆宗の影響がありうるという、新たな仮説を

提起できる。

次に、三年間の研究成果の一端として、『日高一二三、日高乾峰、木宮乾峰文献目録』を作成した。前述の通り、本研究課題の成果として、三者が同一人物であると確認できた。そこで三者の名義による著書等 30 件超、および雑誌記事類 140 件以上について、書誌情報を整理した。戦中から戦後にかけての教科外活動・特別活動の歴史を検討する際、基礎的な資料として活用が期待される。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究課題の成果は、次の通り公開された：①国内外の学会での研究発表、②国内の大学図書館および研究者への成果報告書送付（約 80 件）、③国内外の学術雑誌等への論文掲載（うち 7 件は査読有）。さらに、研究の過程で入手した希少な雑誌等を、筑波大学中央図書館に寄贈し、研究情報の充実や公開に努めた。

得られた成果は、国内外において希少かつ独特な位置づけにあるといえる。その理由として、(1) 特別活動には厳密な評定やテストが求められてこなかった、(2) 特別活動の研究者が少なく、プログラム／カリキュラム評価の研究者も今なお少ない、(3) 特定の活動（学校行事、生徒会活動等）の固有性が重視され、広く特別活動一般としてとらえられてこなかった、(4) 国外の場合、学校教育内に特別活動にあたる内容が目立たない、等を指摘できる。これまでの教科外活動や特別活動の実践および歴史研究に対し、新たな寄与を行ったと目される。

(3) 今後の展望

実践面の展望として、チェックリストを用い、特別活動のカリキュラム評価を試行する必要がある。これは、研究計画の変更により、実施できなかった部分である。

理論面では、教科外活動・特別活動と「禅」との関わりへの注目を、展望として指摘できる。「禅」は、宮坂詰宗・哲文、および日高一二三＝日高乾峰＝木宮乾峰に共通する、重要なキー・ワードと目されるからである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

①根津朋実、「宮坂哲文の父と禅：宮坂詰宗小論」『筑波学院大学紀要』、査読有、第 8 号、

2013、113-122.

②根津朋実、「戦後初期『アメリカ児童画展』に関する覚え書き」『教育学研究』、査読有、第 79 巻第 3 号、2012、1-11.

③根津朋実、「雑誌『小学生の自由研究』にみる戦後初期「自由研究」の一構想」『日本特別活動学会紀要』、査読有、第 20 号、2012、29-38.

④Tomomi, NETSU, "Extracurricular Activities Support Academic Achievement in Japan: Tip of the Iceberg" (Session of Invited Speakers), 『東アジア諸国におけるカリキュラムおよび授業運営方法の特徴と変化』(韓国教育課程学会編、2011 年秋季大会、於慶熙大学、ソウル、大韓民国) 国際会議プロシーディングス(招待講演)、査読有、2011、49-64.

⑤根津朋実、「雑誌『たのしい図画工作』にみる戦後初期「図画工作科」の一構想」『関東教育学会紀要』、査読有、第 38 号、2011、1-13.

⑥根津朋実、「木宮乾峰のカリキュラム論 - 1951 (昭和 26) 年版学習指導要領一般編(試案)の改訂担当者として-」『カリキュラム研究』、査読有、第 20 号、2011、15-28.

⑦根津朋実、「『特別活動の評価』に関する課題と方法 - チェックリスト法の提案-」、『筑波大学教育学系論集』、査読有、第 35 巻、2011、55-65.

⑧根津朋実、「1951 (昭和 26) 年学習指導要領一般編(試案)における教科外活動の課程化 - 木宮乾峰の所論を手がかりに-」『学校教育学研究紀要』(筑波大学人間総合科学研究科学校教育学専攻)、査読無、第 4 号、2011、1-22.

〔学会発表〕（計 7 件）

①根津朋実、「宮坂哲文の父と禅：宮坂詰宗小論」、日本カリキュラム学会第 23 回大会、2012 年 7 月 7 日、中部大学（愛知県）.

②Tomomi, NETSU, "Extracurricular Activities Support Academic Achievement in Japan: Tip of the Iceberg" (Session of Invited Speakers), 『東アジア諸国におけるカリキュラムおよび授業運営方法の特徴と変化』、韓国教育課程学会 2011 年秋季大会(招待講演)、2011 年 11 月 18 日、慶熙大学（ソウル、大韓民国）.

③根津朋実、「日本の学校教育を支える『教科外活動』という視点」、公開シンポジウム「21 世紀初頭の日本の学校教育をどう見るか」シンポジスト 関東教育学会第 59 回大会、2011 年 11 月 13 日、東京学芸大学（東京都）.

④根津朋実、「雑誌『小学生の自由研究』にみる戦後初期「自由研究」の構想」、日本特別活動学会第 20 回大会、2011 年 8 月 20 日、

宇都宮大学（栃木県）．

⑤根津朋実、「雑誌『たのしい図画工作』にみる戦後初期「図画工作科」の構想」、日本学校教育学会第26回大会、2011年8月6日、常葉学園大学（静岡県）．

⑥根津朋実、「木宮乾峰のカリキュラム論－教科外活動の課程化を中心に－」、関東教育学会第58回大会、2010年10月24日、聖徳大学（千葉県）．

⑦根津朋実、『『特別活動の評価』に関する課題と方法』、日本特別活動学会第19回大会、2010年8月22日、名古屋学院大学（愛知県）．

〔その他〕（計2件）

①根津朋実、「日本の学校教育を支える『教科外活動』という視点」（第59回大会公開シンポジウム報告のまとめ）、『関東教育学会紀要』、査読無、第39号、2012、68-70.

②根津朋実、『日高一二三、日高乾峰、木宮乾峰文献目録』、平成22-24年度科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号22531010）報告書、2013、全34.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

根津 朋実（NETSU TOMOMI）

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号：50344958